

# 富山県俳句連盟会報

第 81 号  
富山県俳句連盟

平成二十七年十二月一日発行  
富山市安住町二一四  
〒930-0094 電話(076)494-1515  
振替番号 金沢 五二七二〇八  
北日本新聞社編集局内

第六十四回 富山県芸術祭主催  
第十九回 富山県民芸術文化祭参加

## 秋季俳句大会

吉田 泉先生の講演を聴く

富山県芸術祭主催並びに富山県民芸術文化祭参加の秋季俳句大会はこの上なき秋晴れの十月三日(土)午後一時から、北日本新聞ホールにて、百三十余名の参加を得、開催された。坂田直彦幹事司会のもと中坪達哉会長が「癒しの文芸であ

る俳句の良さを自覚し、今日を一つの糧にして欲しい」と挨拶。続いて、富山県芸術文化協会会長、吉田泉先生を講師に迎え「俳句と私」という演題で、グローバルな視点でレジメの永井龍男の短編『冬の日』に俳句の手法

を見るののを見解を聞く。

(講演要旨は別掲)

小憩後、俳句大会に入る。すでに出句されている七一八句(三五九名)について連盟役員に選考された特選句、入賞句を野中多佳子、田村京子両幹事より発表。

そのあと森野稔理事、跡治順子理事、野中多佳子幹事、田村京子幹事、高村寿山理事から講評を受ける。

引き続き表彰式に移り、寺田幹北日本新聞社文化部長より北日本新聞社賞、中坪達哉会長より



挨拶の中坪達哉会長

り連盟賞をそれぞれに贈呈された。(成績は別掲)

石工冬青副会長が閉会の辞を述べ大会は盛會裡に終了。

尚、当日、連盟合同句集(第四十集)を発刊し、配布した。同句集には平成二十二年秋から二十七年夏までの連盟の歩みを掲載している。

又、北日本新聞社主催の「越中賛歌」作品テーマ(は河・川(投句数三五六句))の入賞句は北日本新聞十月十七日付け朝刊に掲載され、発表となった。

### 連盟夏季吟行会

滑川市西部地区コミュニティホール

七月二十日(月)夏季吟行会を開催。滑川市西部地区コミュニティホール(滑川市加島町一九四)の一階大ホールを会場に共催を頂いた滑川市長の挨拶を頂き、講師に滑川市立博物館、主任学芸員の近藤浩二氏を迎え、「ホテルイカのまち」滑川へ誕生とその歩みについての演題で講演を聞く。

宿場回廊巡り、橋場など古い町並み、芭蕉句碑などを吟行し、二句投句のあと連盟役員が選句し上位入賞作品を発表。参加者一〇二名

天位  
みな昼寝してゐるやうな宿場町  
荒田眞智子

地位  
道曲るたびに炎天ありにけり 川上 弥生  
人位  
句碑一つ見て来し日傘たたみけり 久崎富美子

### 富山県現代俳句協会

#### 秋季吟行俳句大会

九月六日(日)、秋季吟行俳句大会を富山市呉羽町、呉羽会館にて開催。参加者三十五名。パネルディスカッション方式で講評。

天位  
売れるたび声軽くなる梨売女 八尾とおる  
地位  
梨たわわ迷路のやうな下り坂 高木 昭夫  
人位  
空拌み羅漢を拌み秋涼し 堀 智恵子

十一月十四日(土)同協会の第十回ジュニア俳句大会を開催。県教育文化会館にて優秀作品を発表。  
投句数三九校三二六〇句

富山県知事賞  
しかられてせみといっしょに鳴きました  
魚津市立本江小五年 安藤 稜人  
富山県教育委員会賞  
雲も夏ターザンロープで風になる  
富山市立奥田北小四年 山田 梨緒

他、北日本新聞社賞、協会賞など多数の児童作品を発表する。

平成二十八年度

#### 総会・俳句大会(予告)

とき 平成二十八年六月四日(土)  
ところ 北日本新聞社ホール  
講師 「春耕」編集長  
「東京ふうが」代表  
藁目 良雨 先生  
(詳細は追って発表)

秋季俳句大会作品抄

◆連盟選者特選句

- 義 信選 寝かされて無職の貌となる案山子
順 子選 子等来るぞ翁が作る日向水
冬 青選 新幹線稲架に新たな風生る
玲 子選 追ひかけて夫に手渡す夏帽子
未 知選 墓洗ふ部活の話聞きながら
置 箔選 空澄みて銀河の瀬音聴こえけり
久 裕選 鯉跳ねて湖の万緑破れたり
康 美選 YESともNOとも言へず林檎むく
江 美選 散居村一戸一戸に蝉の声
城 子選 お日様をまん中にして梅を干す
ゆ 子選 寅さんに会えそうな道はしり梅雨
弥 生選 歩くこと忘れし母の素足かな
富美子選 麩料理のふの字ひとつの夏のれん
美智子選 涼しきは一〇四才を生きたし母
洋 彦選 かき水ずり落ちさうな子の眼鏡
直 彦選 YESともNOとも言へず林檎むく
一 彦選 前傾に耐え立秋のモアイ像
春 美選 流灯を送りひとり灯に帰る
重 美選 つくつくしひとり遊びの女となり
吉 章選 戦争を話す人なく盆三日
桂 子選 揚花火昭和の橋も架け替り
恵 子選 名前すぐ出ぬもどかしき田水沸く
圭 二選 お盆来る戦の記憶引き連れて
昭 夫選 花火果つ闇ぞろぞろと動き出す
眞知子選 仰臥して見し立山嶺の星月夜
寿 山選 墓洗ふ部活の話聞きながら
長 穂選 男の子とは離れゆくもの雲の峰
徳 子選 髪型は思いっきりカット青劔岳
京 子選 恙なき日々や狭庭の草を引く
三 久選 爺元氣どう曲がろうと胡瓜なり
達 哉選 これからは大人の時間キャンプの灯
三津夫選 出航の汽笛に日傘高く振る
宗 承選 母胎とはかくなる揺れかハンモック
敏 子選 あたふたと見慣れたる世へ昼寝寛
信選 生身魂シベリア語る目の潤み

- 八尾とおる
中 静子
磯野くに子
杉本 恵子
水本 玲子
山本 恭子
寺島 皎
但田 長穂
魚 俊久
田村 浩美
能登 恭子
岡本 芙美
室井千鶴子
野中多佳子
島倉 晶子
酒井千枝子
魚 俊久
中山 蒼楓
野村美智子
佐藤 悦子
大坪 悦子
酒井きよみ
土田 由朗
丸田美恵子
馬坂琉美子
脇坂 和子
山本 恭子
荒田眞智子
平瀬 重子
成瀬 輝代
久保 優一
安居 雅寿
若土 白羊
川井 城子
濱元 旭子
源通ゆきみ

◇入賞句

- 天位⑩ 寝かされて無職の貌となる案山子
地位⑪ この初めし児に明け渡す夏座敷
人位⑨ 流灯を送りひとり灯に帰る
4位⑧ プールの子水脱ぎ捨てて上がりを守り
歩くこと忘れし母の素足かな
5位⑦ 道灼けて煙出さうな影法師
落蟬の手足は胸にたたまれて
朝顔の鉢に大きく子の名あり
生き過ぎと破顔の母や心太
6位⑥ 麩料理のふの字ひとつの夏のれん
名水を称へて越の新走り
今は娘も母の貫禄梅漬ける
露の身の忘却もまた生きるすべ
風鈴の鳴らねば触れて鳴らしけり
老いてなお足ること知らず浮いてこい
募参り父似母似の顔揃ふ
あたふたと見慣れたる世へ昼寝寛
四五本は川を飛び越え曼珠沙華
墓洗ふ部活の話聞きながら
庭下駄の赤き鼻緒にある残暑
あやふやな平和を説かれ百日紅
水打つて朝一番の診療所
散居村一戸一戸に蝉の声
捨たせぬ葉書一枚盆の月
出航の汽笛に日傘高く振る
千の灯に千の悲しみ流燈会
枇杷の種どこから話切り出さん
YESともNOとも言へず林檎むく
炎昼の電柱降りる保安靴

- 室井千鶴子
角田 睦子
二俣れい子
東 靈女
堀田千柳子
大木保置滔
寺島 皎
八尾とおる
成重佐伊子
野村美智子
杉本 恵子
室井千鶴子
脇坂琉美子
金山 千鳥
古村 寛子
飯干ゆかり
二口わこう
水野すみこ
野中多佳子
大西 昭子
杉本 恵子
清水 雅夫
大崎 寛子
谷口萬里子
濱元 旭子
久崎富美子
山本 恭子
神田 邦子
新村美那子
山西 澄子
田村 浩美
木村 柳子
若土 白羊
小幡富貴子
寺田 恭子
魚 俊久
大西 昭子
森野 稔

「越中讃歌」(河・川) 高点上位入賞作品
川音と共に暮して盆用意
カヌー漕ぐふるさとの川水澄めり
ふるさとの小川に廻る芋車
船持む他なき秘湯水の秋
家持の詠みし延槻雪解川
山本 恭子
野中多佳子
飛田雪貌子
関 昌子
新田 義博

俳人協会新役員に就任
評議員 中坪達哉 眞俳連会長
幹事 野中多佳子 眞俳連幹事
向集ほか出版紹介
清流俳句会「清流句集第五集」
町田忠治「冷し瓜」
青木和枝「白山茶花」
道賀房枝「たんぼぼ野道」
平 27・9・8
平 27・9・9
平 27・9・9
平 27・9・9

訃報
富山県俳句連盟元副会長 寒潮代表 神保 弥生
八月二十六日、ご逝去。謹んで哀悼の意を表します。
向碑建立
北陸新幹線開業記念 黒部市宮野山公園
新幹線祝ぎて萌え立つ黒部川 松田郷人 平27・4
「黒部川」創刊十周年記念
俳句額奉納 朝日町 脇子八幡宮 平27・6
お詫びして訂正
眞俳連合同句集第40集19頁 正 神保弥生

## 講演要旨



## 俳句と私

(一社) 富山県芸術文化協会会長

吉田 泉

現代において果たす俳句の役割は、私たちの考え  
る以上に幅広いものがあるのではないかと思った。

たとえば先日富山県立山博物館を訪れたとき、面白い発見があった。立山にはかつて立山温泉という温泉があり、年間1000人以上が訪れて、江戸末期には女性たちもその温泉に親しんでいたということであるが、彼女らはほんとうにお湯に入り楽しんでたのか…を検証するために、博物館のある学芸員のかたは当時詠まれた俳句をその根拠にしたのである。深見家に代々伝わる『寢覚めの記』なる台帳を参照すると、「きむすめも小家戸かしましゆおぼろかな」とか「立山や湯壺にうつるめおと星」などという句が書かれており、庶民の遊興のさまが如実に迫ってくるという。まさに確たる証拠となるのである。

これを聞いて実にいろんな俳句の使い方があるものだと感じた。

まだある。これは世界文学史にかかわる大事件だが、20世紀初めに英米で起こった「イマジズム」の運動は、ギリシャ・ローマの短詩形やフランス象徴詩とともに、実に日本の俳句がその根底にあるというものである。それは俳句の「極端に短いこと」「重置法（二つの異質なイメージを重ね合わせる方法）」「開かれた形式であること（連句から出ていること）」に合致した、西欧の詩学の革新運動でもあった。残念ながらこの運動は短命に終わったが、ちょうど日本の浮世絵がヨーロッパの印象派の画家たちに大きな影響をもたらした、近代絵画の歴史の潮流を作ったことにも比されるべき、文学上の功績である。

考えてみるまでもなく、俳句は日本人の心の故郷にも等しい。短歌ももちろん私たちに親しまれた古い詩形ではあるが、その両者は本質的に違う特質を備えている。歌（短歌）はもともと「訴う」から来ているとされ、俳句が望む「論理性からの解放」とは大きく異なるだろう。ちなみに或る俳句と或る短歌とをフランス語に訳してみると、興味深い点が浮き彫りになる。「岩鼻やここにも一人月の客」（去来）をフランス語にすると《Au plateau de roches, la j'ai aussi trouve une autre personne invitee par la lune.》となり、俳句の意味合いとフランス語の間には多くの隙間があるように感じてしまう。つまり訳しにくい。第一フランス語では「月の客」は日本語に直訳すると「月に招待された人」となっており、これでは月見の習慣などまったくない欧米人には「頭のおかしい人」という意味に他ならなくなる。本当である。それに対して例えば「まつぶさに眺めてかなし月こそは全き裸身と思ひ至りぬ」（水原紫苑）という現代短歌を訳すると《En observant avec tristesse la lune, j'arrive enfin a la

trouver en toute sa nudite.》となって、これは前者に比べてはるかに欧文の流れに乗りやすい作業であった。つまり短歌では月の本質が問題とされ、その本質に迫り自らの斬新な美意識を表現することがすべてとなっている。俳句は月の本質に迫ることなどないであろう。

芭蕉が言うように俳句は「いいおおせてなにかある」の世界である。また外山滋比古先生の指摘するように俳句とは完結性の貧しさを嫌って省略と禁欲による余情の追求であり、その裏では本当の意味は揺れ動くばかりであり、しかもそれが肯定される世界なのである。

さて私は俳句よりはむしろ散文的な人物であり、掌編小説のほうに趣向を持つものであるが、そんな中で見事だと思うのが永井龍男さんの短編小説である。周知のように氏は俳人としても高名で、私は氏の『冬の日』という作品を読んだとき、この独特の完成度はもしかしたら俳句の手法から来ているのかもしれないと薄々感じてきた。川端康成の掌編もとても好きだが、この両者の間には根本的な違いがあると思う。『冬の日』を具体的に解析することによって、その一端をお示しできるのではないか、というのが本講演の目的である。

例えば「梔子の実」がある。これはどんな意味合いで出てきているのか？ 川端の『ざくろ』という小説と比較すると面白いと思う。また「豊職人の親子」が遠景として描かれているが、この効果は何か？ 「元旦に見る大夕焼け」とはどう解釈できるのか？ 小説の最終行の「鏡餅の罅」の役割は何か？ 当然のことながら、ふんだんに盛り込まれた「歳時記」の利用にも触れなければならない。

分析が分析に終わるのではなく、やはり最後には総括が行われなければならないだろう。俳句とは  
1) 禁欲的であること（極端に短いこと） 2) 神秘的であること（意味解釈の多重であること） 3) 意外性を持つこと（発句としては次につけられる句によってガラリと様相を変えること）… これらを統合すると、私には一定の俳句のイメージが浮かんで来る。このつとめて日本的なるものの根底には何が横たわるのか？ ご参集の方々と一緒に考えながら、ある種の結論めいたものが抽出できれば幸いです。よろしくご参加ください。

平成28年度

夏季吟行会(予告)

とき 7月24日(日)

ところ 砺波市庄川町

庄川生涯学習センターホワイエ

講師 庄川美術館 館長 松村 樹 先生

俳人協会富山県支部

俳句大会

九月二十三日(水)、富山電気ビルにて開催。俳人協会理事で、「天為」「藍生」の坂本宮尾氏を講師に迎え、「女性俳句の先駆け」中川富女、澤田はぎ女、杉田久女」の演題で講演を聞く。

講師特選

帰省子と家業不振を告げず飲む

但田 長穂

流刑の地せめても群れて釣舟草

川井 城子

昼月や日差しにけむる合掌家

中坪 達哉

行事めく年に一度の栗の飯

山本喜美子

灯りては窓の生まるる夕花野

金山 千鳥

☆互選高句

月光の満ちて一人の身に余る

平譯 敏子

晩学の今が青春いわし雲

脇坂琉美子

口角を上げよと鏡吾亦紅

川井 城子

俳人協会主催、全国俳句大会第五回ジュニアの部、学校賞(小学校の部)

高岡市立伏木小学校

消息

七月十六日、入善町民会館にて、県民カレッジ教養講座を開催。講師は「荒海」主宰、日本現代詩歌文学館評議員の船平晚秋氏。演題「俳句と人生」

萌芽俳句記念大会

六月二十七日、俳誌「萌芽」通巻二一〇号複刊18周年記念俳句大会を射水市小杉社会福祉会館にて開催。但田長穂連盟副会長が「一期一会」と題して講演。投句数一五八句を互選。

天位

啓蟄やラジオの波調狂いだす

芝田 禮子

南砺市交流俳句会

七月十九日、福野ヘリオスにて開催。梅島くにを、岩城未知、久保美智子、田上真知子、川井城子の各氏が選句。参加者三十一名。

城端俳句協会虫干法会俳句会

七月二十四日善徳寺会議室にて開催。参加者二十五名

岩城未知俳連理事特選

松影の涼し鼓楼と勅使門

梅島くにを

川井城子俳連幹事特選

修復の現場公開お風入れ

岩城 未知

南砺市いなみ国際木彫刻

キャンプ2015俳句会

八月二十三日、井波瑞泉寺、瑞泉会館にて開催。参加者四十名。

実行委員長賞

迷ひなき蟄のひと打ち涼新た

安藤やすを

辛夷年次大会

十月十一日(土)富山電気ビルにて開催。

平成二十七年年度

衆山皆響賞 野村 邦翠

秀 嶺 賞 野村美智子

奨 励 賞 田村 浩美

大会句天位

癒えし手に蚊を打つ音の戻りけり

吉野 恭子

「寒潮」平成27年度総会・俳句大会

十月十七日(土)富山観光ホテルにて開催。総会冒頭、神保弥生代表の冥福を祈り、運営委員会により真野賢貞俳連幹事を次期代表に選出。投句数三三四句。講師 飛田雪豹子氏

演題「印象に残る身近な作家たち」

句読点どこへ打とうか青山河

神保 弥生

地 位

風の盆果てて男は風になり

柄沢 恭子

語り部に平家の面差し夏炉燃ゆ

小野田洋子

第43回 砺波市文化祭俳句大会

十月十七日(土) 砺波市文化会館にて開催。投句数二五五句 八五名参加

中坪達哉俳連会長 選

天位

帰省子の来ると知りつつ畑にをり

永井 邦子

地 位

秋茄子や嫁と呼ばれし日の遠く

水木 柳子

空缶を吊してこれも鳥感し

西口 鶴子

人 位

居眠りの中にも秋の蝶飛べり

中神 萌子

かまつかの残る力で立ちにけり

高畠 英

彫り進む木肌に艶や秋の風

富樫アヤ子

中郎宗承俳連理事

天 位

錆點の厚化粧して焼かれけり

水木 柳子

地 位

倦むわれに金魚逆立ちして見せり

田村 浩美

土地訛り訥々蕎麦の花ざかり

紫藤 節子

人 位

喜々として影絵踏む児や月今宵

堺井 洋子

菊香る白寿の姑の笑ひ皺

長久 尚

秋晴や海から空へ千枚田

根田 勝子

第34回 小矢部市芭蕉祭俳句大会

十月三十一日(土) 石動公民館にて開催。講師野中多佳子俳連幹事

演題「俳句とふるさと・富山の句碑を訪ねて」

投句数一般六六句、児童九十句。

天 位

打上花火抱きし小犬の鼓動聞く

山崎 康子

第十八回 扇状地俳句大会

十一月八日(日) 善町民会館にて開催。投句数 一般七六句。ジュニア、一九二句。秀作を表彰し、野坂千佳子氏、船平隆子氏、清田圭一、高村寿山各俳連理事が選評。

天 位

三代代みなそれぞれに夜長の灯

上原 悦子

地 位

大根引く昭和の余力まだ残し

飛田雪豹子

人 位

川底に魚影走る水の秋

上原 悦子

氷見市民俳句大会

十一月十五日(日) 氷見市中央公民館にて開催。講師、中坪達哉俳連会長。

講師特選

会いそうな人に会いたり菊花展

川原小夜子

伸び代はまだあるつもり冬ざくら

舛田 敏子

長き夜の手足にすりこむ痒み止め

舛田 敏子

新米を奥にしまいで古米炊く

山崎 和子

月白し術後の傷に触れてみる

正水多嘉子

宮西 昌子

編 集 後 記

連盟会報81号をここにお届け致します。次回は平成二十八年七月一日発行予定です。会報に関する記事等があれば、原稿用紙に記入の上、左記に送付下さい。(郵送又はFAXのみ) 千九三九一一八一 南砺市理休二二六 川井 城子

FAX・TEL(076)261-1308